

# 隱溪禪師の儒佛合論

福 島 俊 翁

文化十三年（二四七六）原念齋の著した先哲叢談の中に、山崎闇齋（二二七八一—二三四二）は嘗て羣弟子を集めて、

方今彼の邦、孔子を以て大將と爲し、孟子を副將と爲し、騎數萬を率ゐる來つて我が邦を攻むるときは則ち吾黨孔孟の道を學ぶ者、之を如何となすやと曰ふ。弟子咸答ふる能はず。曰く、小子爲す所を知らず。願くは其の説を聞かんと。曰く、不幸若し此の厄に逢はば則ち吾黨は、身堅を被り、手銳を執り、之と一戦し、孔孟を擒にし、以て國恩に報ぜん。

此れ即ち孔孟の道なり。（卷三、原漢文、以下引用文は便宜、和文に換ふ、之に倣へ）

と教へたといふことが見えてゐる。このことは有名な話頭で、闇齋の國家思想を餘りにもよく顯はしてゐると思ふ。がかうした闇齋の國家的思想の由つて來る所は那邊に在つたかと言へば、畢竟彼が極めて忠實に信奉し、宗教的だとさへ言はれる程に心酔した朱子の學問精神に負ふものであると

言ひ得よう。言ふまでもなく、宋學ことに朱子一派の儒學は、聖賢の言語文章によつて記述された經典の訓詁解釋に重點を置いて、古典の客觀的な研究に終始する傾向の多い漢唐時代の所謂經學に嫌らず、直に進んで孔孟の精神を理會し、古聖賢の内面的生活を自ら體驗せなければ止まぬといふ主義であつた。故に孔子が周の皇室の興隆を企圖し、その禮樂を復興し、國家人心の和平を唱道し孟子が之を祖述して王道仁義を鼓吹した精神から言ふならば、我が日本の儒家が皇國の爲に最大の犠牲を拂つて當面の外敵を排撃し、邦家萬年の洪基を鞏固にするのは蓋し當然のことであらう。

この山崎闇齋は其の少年時代に我が妙心寺塔頭大通院の湘南和尚の弟子となり絶藏主と呼ばれた人である。穎脫豪邁不羈の才を以て、後土佐の吸江寺に行き、同寺の檀頭で朱子學者である野中兼山に勧められて専ら儒典を研究し、朱子語類文集を讀んで大いに得る所があり、「闢異」と名くる一卷を著してここを去つた。(註一)

「吾幼年にして四書を讀み成童にして佛徒たり。二十二三にして空谷の書に本づいて三教一致の胡論を作る。二十五にして朱子の書を讀んで佛學の道にあらざるを覺る。則ち逃れて儒に歸す。今三十にして未だ立つこと能はず、深く吾の早く辨ぜざりしを悔い、又人の終に惑ふべきを懼る。」

(註二)

と自ら述ぶる所によると、闢異一卷は遅くとも彼の三十歳の頃に書かれたものと思ふ。(註四)而して彼は

予既に此篇を述ぶるに、佛氏泰伯の迹を引いて、以て程子迹斷の言を難じ、理障の説あつて、以て朱子宇宙の章を難じて謂へらく、程朱も亦佛老を學んで而して其身儒者たるを以て、陰に之を用ひ、陽に之を闢くも、而も輕々しく信じて之を述ぶるなりと。或ひと以て告ぐ。吾之に謂つて曰く、程朱の門、千言萬語、只學者をして正道を守り、異端を闢かしめんと欲するのみ。竊に之を歴考するに、未だ迹斷の言の若く要にして的るもの有らざるなり。未だ宇宙の章の若く明にして備はれる者有らざるなり。彼能く三復、思を致さば、則ち亦以て感悟興起すべきなり。惜しいかな、然る能はざるや。今且に之を辨ぜんとす。夫れ天下の道は經有り、權有り。經は萬世の常にして、人皆以て守る可きなり。權は一時の用にして、聖賢に非んば用ふる能はざるなり。朱子曰く、湯の桀を放ち、武王の紂を伐ち、伊尹の太甲を放つが如き、此是れ權有り。若し日日時時之を用ふれば、則ち甚たにの世界を成し了らん。泰伯の逃るるも、亦權なり。故に伊尹の志無くして其君を放つは、是れ君を無みする者なり。夫の理障の説、程子、人の此の間ふに答へて曰く、釋

氏に此の説あり。謂へらく、既に此の理を明にして而して又是の理を執持す、故に障と爲す。此れ錯つて理の字を看了するなり。天下只一箇の理あり。既に此の理を明にせば、夫れ復何を障せん。若し理を以て障と爲さば、則ち是れ已に理と二と爲る。朱子が李宗思に答ふる書に曰く、來書に云ふ、理を以て障と爲す者は、特に其の私意小智を去らんと欲するのみと、熹謂へらく、私意小智を認めて理字と作すは、正に是れ理字を知らざるなりと。來書に又謂ふ、上蔡云ふ、佛氏は肯て理に就かざるを非と爲すと。熹謂へらく、若し理字を識らざれば則ち此れ亦未だ口舌を以て争ひ易からざるなり。他日此を解すれば、乃ち言ふ所の笑ふ可きを知らんのみ。夫れ程朱の學始め未だ其の要を得ず。是を以て佛老に出入す。其の反り求めてこれを六經に得るに及んで、豈佛老を用ひんや。其の之を闢くや、綱常を廢するの罪あればなり。若し用ふ可きの實あり、闢くべきの罪なくして、陰に用ひ陽に闢かば、何を以て程朱と爲さん。(註三)

とも言つてゐる如く、彼が關異を書いた主意は、佛教が特に人倫を無視し、人道に背く所があるといふに歸するのであつて、此の點を朱子の語言をかりて江湖に喚唱し、大いに儒佛の相違を闡明しようとしたものである。この關齋の關異は崎門派即ち關齋學の基本的な思想であるが、後に彼は儒より神道に入つて垂加流を唱道するやうになつたことは周知のことに屬する。而して其の當時朱子

學に反對する我が國の學者には山鹿素行や伊藤仁齋や、荻生徂徠の如き人々が殆ど時を同うして輩出してはゐるが、特に儒佛の關係を中心として朱子に論及し、或は又直接に關齋の關異に向つて正面から辨難するといふ風なものを見出さない様に思ふ。

然るに我が妙心寺塔頭蟠桃院の四世隱溪智脫和尚（別に含空子と號す）は寛文八年（二三二八）に儒佛合論九卷凡そ十萬言を著して出版し、（註五）大いに我が宗門の爲に辨ぜんとしてゐるのである。顧ふに此書の出來たのは關齋の關異が書かれた年から凡そ二十年後である。

隱溪は關齋の關異を読み、其の中から凡そ二十二條を摘記し、朱子の所論の一一に就いて、詳細に檢討批判し、その根本的な誤謬を論斷しようと試み、世の朱子學者達が我が佛法を異端として疾忌すること恰も冤讎の如くし、自己の功を張らんとして、他人の徳を掩ひ、心を昏迷して自ら燭す所を知らざるを見、箝口黙止する能はずして、憤を禪餘に發したものであると自ら言つてゐる。

私はこゝにこの隱溪の儒佛合論中に述べてゐる思想の一斑を略記し、此の種の文献に乏しい妙心寺派先徳の遺芳を紹介したいと思ふ。

隱溪はこの論の初に當つて、大道の本論を叙して曰ふ、物あり天地に先つ。形無うして本寂寥。

之を佛教では真空といひ、儒教では無極といつてゐる。真空が有つて妙有があり、妙有があつて俗諦がある。又無極が有つて太極があり、太極が有つて天地があり、天地有つて萬物がある。萬物があつて品類があり品類があつて聖人があり、聖人があつて言教がある。凡て言教の設けは、儒と佛と迹を異にしてゐるけれども、聖學の樞要は唯々心性の一理に在るのである。孔子は「天下國家は均しくす可し、白刃は蹈むべく、中庸は能くす可らず」と曰ひ、吾が古徳は、「富貴崇高の勢は讓るべし。貧賤孤陋の極は樂しむべし。飲食は斷つべし。身命は棄つべし」と曰つてゐる。この理を審にせねばならぬ。萬物の根源、天地の太祖、死も生も之に本づかないものはない。然し幽遠不揚、退いて密に藏れてゐるが故に、世の聖賢も不知不識を以て盡してゐる。吾が佛教に非ずして孰が之を明に知るものがあらうか。知る所の心法を推して普く群類を引導するのである。引導の施設は尺も短しとする所があり、寸も長しとする所がある。機宜に應ずるの故を以て頓漸權實の説がある。然し一眞の妙を極めるのは心法に本づかぬといふものはないのである。ああ心法の設教は佛教を捨てて何くに求められやう。(註六)

右の様な主張を隱溪は儒佛合論の卷頭に掲げ、以下更に朱子や韓愈や歐陽修等の排佛論者に向つて痛棒を加へてゐるのである。

先づ朱子が吳人傑に答へた書翰に就いて見ると、朱子は、佛と儒とは、略々相似た處はあるが、それは貌丈けで心は異つてゐる。儒の方でいふ「道」は君臣父子日用常行當然の理を行ふ實踐法則である。釋氏の所謂豁然大悟、通身汗出すといふ風な玄妙奇特にして測り知るべからざる底のものがあるのではない。如今更に力を別の處に用ふことを求めず、敬を持し理を窮めるのみである。言へば必ず忠信、行へば必ず篤敬、念々忘れず、到る處常にこの言行について心目の間を離れない事を説くのみで、堯を堯に見、堯を牆に見ると言ふが如くするので、我の心を以て還た我が心を見て、別に一物として身外に在りとするものはない。禪家の悟入に於ては、「心思路絶、天理盡見」といふ事を言ふけれども、心思の正が便ち是れ天理である。流行運用、凡て天理の發見で無いものはないのである。豈心思路絶を待つて後に天理が見はれるであらうか。一體天理とは何物であるか。仁義禮智である。君臣父子兄弟夫婦朋友それが天理である。又儒は下學して上達するの學で漸修である。佛は頓悟を用ひて漸修をからず、上達して下學するといふ不合理を説くものである。程子も已に言つてゐる様に佛家では父を逃れ、家を出で、人倫を絶ち、山林に獨處する。而して自己は君臣父子夫婦の道を爲さずして、他人はかくの如くする能はずとし、人は之を爲すべきも、己は之を爲さずして別に一等の人と做すのである。かくの如くして之を率ゆることは類を絶するものである。

と言つてゐる。之に對し隱溪は朱子の道は君臣父子日用常行當然の理といふ説を論駁して、孔子が、朝に道を聞いて夕に死すとも可なりといふのは君臣父子を以て道とするか、常行當然を以て道とするか。道が若し日用當然底にあらば則ち黙して之を識すとは謂ふまい。孟子が我能く浩然の氣を養ふと云うたが、君臣父子を用つて氣を養ふのか、日用當然を以て氣を養ふのであるか。道若し日用當然底にあらば既に自ら曰く言ひ難しとは謂ふまいと思ふ。曾子の一以て之を貫せりと言ふのも君臣父子を貫するか、常行當然を貫するか。既に唯として自得した所を見ると、日用常行とは言ひ難い。子貢の夫子の文章は得て聞くべし。性と天道とは得て聞く可らずといつてゐるのを見ても孔子の道にも幽遠不揚常行當然を以て求むべからざるものがあることは必然である。(註七)

朱子は釋氏の教が玄妙奇特云々といつてゐるが眞の佛道は名の名づくべき無きもので、義學を以ては測る可らず、世知を以ては究むべからざるものがある。其の無を無とすれども盡すこと能はず、其の空を空すれども了すること能はざるものは禪の一法である。此の一法は我が門では教外別傳の宗旨といひ、十年五歳自ら心を止め、慮を絶し、體究するに非れば、其の旨に達することは出来ない。魚に非れば魚の樂を知る可らず。吾に非れば吾の樂しむ所を識り得ないのである。(註八)

六祖大師は「外に一物無くして能く建立す」といひ、景岑禪師は「盡十方世界は自己の光明裏に



あり」と曰つてゐる屠隆居士は一物を論して云ふ、「心は一のみ、已に二あるに非ず。圓融無礙なるを以ての故に、外百物を觀じ、内一心を觀ず。只此の一心、外百物を觀る、之を放光と謂ひ、内一心を觀ず、之を返照と謂ふ。能く放光し能く返照するは此の心の靈明たる所以なり」と言つてゐる。が朱子の「我の心を以て還た我心を見る、別に一物として身外に在りとなさんや」といふ一物は何れの處にあるのであらうか。(註九)

朱子は心思路絶を云爲せぬと言つてゐるが、或人が程子に、「中を喜怒哀樂未發の前に求めんか」と問うた時に、程子は、「求むる時は是れ思ふことあり。思へば是れ已發なり」と答へてゐる。此の意味は心思路絶ではなからうか。周茂叔は、「無欲なるが故に靜なり、喜怒哀樂の未だ發せざる之を無欲と謂ふ」と言つてゐるのも心思路絶といはねばなるまい(註一〇)とて隱溪は他の幾多の宋儒の言を擧げて朱子の矛盾を論證してゐるのである。

朱子の李宗思に答へた書に、

釋氏は死生に本づく。悟る者は須らく徹底に悟り去るべしと。故に祖師以來此に由つて道を得る者多しと。熹謂へどく、徹底に悟り去るの人は、知らず本末内外是れ一か、是れ二か。二ならば

則ち道に二致あらん。一ならば則ち死生人事一以て之を貫して了らざる所無し。知らず傳燈錄の中、許多の祖師幾人か堯舜禹稷を做し得たる。幾人か文武周公を做し得たるかを。須らく徵驗の處有るべし

と。之に對し隱溪は佛師の徵驗は大道に在る。妙用を以て之を擬することは出來ないが、妙用は道德の神驗である。大凡賢傳に載つてゐる神僧異僧の事蹟を考へると、生きて心行を施せば感應の指擲、天地を胸裏に呑み、神通の妙用、造化を掌中に環らす者がある。諸天奉行して鬼神擁護し、百鳥花を啣み、虎狼役を執る者がある。滅して寂光に入る時は、身形朽ちず、舍利光を發する者があり、鳥獸哀鳴して月を愈え、異香芳郁として匂を経るものがあり、山林白に變じ、溪澗流を絶つ者があり、白虹岩壑を貫き、神旛山藪を遶る者がある。其の徳の及ぶ所、杲日天に麗き、陽和の物を照るが如く、其の神力と徳化とは徵驗に由つて之を論ずれば則ち世の聖人、何を以てか之に配することが出來よう。世を同うして語ることは出來ぬ。(註一一)

と煙に卷き、更に朱子が李宗思に向つて

來書に曰く、儒佛の見處、既に二理なしと。其の設教何ぞ異なるや。蓋し儒教は人事に本づき、釋教は死生に本づく。人事に本づくが故に見性に緩なり。死生に本づくが故に見性に急なりと。熹

謂へらく、既に之を本と謂へば、則ち此上復物有ることなし。今既に本を二にす。知らず、同じき所の者は何事ぞ、而るに所謂儒は人事に本づいて性を見るに緩なりとは、亦殊に理なし。三聖易を作る。首に曰く、乾元亨利貞と。子思中庸を作つて首に、天命之を性と謂ふと曰ふ。孔子性と天道と言ふ。而して孟子性善を道ふ。此れ人事に本づくとするか。天道に本づくとするか。性に緩なるか。性に急なるか。……直に是れ性を盡して命に至ること方には是れ極る。則ち見性の説、一見して遂に已むが如きに非る也。

と言つてゐるに對し、隱溪は、儒者の存養は人倫人物の上に在つて黏帶着實を免れぬ、内には百慮節なく、外には萬物競を設け、行坐には思想し、偃臥には魂夢する。是非の感動に由つて分段の形器を煎熬し、耽淫の汚欲を以て老軀の筋骸を使役し、名は利の鈎となり、利は名の餌となつて方寸の間に蟠り、手足羈鎖、跳躍を恣にするを得ず、痴愛を進退に設け、貪瞋を起居に發し、……天理道源を究めることが出来ないのである。孔子も「道の明かならざるや、我之を知れり。物の累に由るなり」と曰ひ、沈休文も「人、道を得ざる所以は心神の昏惑に由る。心神の昏惑する所以は外物の之を擾るに由る」と曰つてゐる。然るに出家の存養は世事の爲に縛られず、物欲の爲に累はされず、桎梏を脱去して四支宣轉、動は雲と無心に、靜は石と何の機あらん。物我一致して端邪徑塞、

行も又禪、坐も又禪、語默動靜、體安然、適くとして理に順ぜずといふことなく、循ふとして性に由らすといふことがない。大寂靜の境に入つて速に流浪の難を免れ、無餘涅槃の樂を得て、永く生死の苦患を脱し、道の明らむ可き無く、理の悟る可き無ければ則ち已むものである。(註一二)

といひ、朱子が心とか念とか言つてゐるものも眞性の邪であつて、生死流轉の本源である。佛教では本性に本づいて教を設け、人天を引導し、心を本性に歸せしめるのである。心を本性に歸せしめるといふことは、空寂によつて空寂の想を作さず、紛擾によつて紛擾の想を作さず、歡喜によつて歡喜の想を作さず、苦惱によつて苦惱の想を作さず、設へば明鏡の臺に當つて萬象畢く呈すと雖も、光性累なきが如きである。如何となれば經に所謂「無所住而生其心」が故である。この所住なくして其の心を生ずる時は、喜怒哀樂は寂然の中に感通して、自然に節に中るのである。虚心にして事に應ずるならば、喜怒しても喜怒哀樂ならず、哀樂しても哀樂ならず、恁地に和を爲すのである。和は理に逆はず、事に戻らず、自然に道と一となる。之を儒教では寂然感通といひ佛教では寂而常照といふのである。蘇子由も

外に物無く、内に我無し。物我既に盡れば、心全うして亂れず、物至れば可否を知る。可なれば作し、不可なるは止む。其の自然に因つてなして、吾は未だ嘗て思はず、未だ嘗て爲さず。此れ

所謂思ふも無く爲すも無きなり。

と言つてゐる。かくの如き無思無爲こそ眞性である。其の心を擧して喜怒を行じ、其の念を動じて愛惡を發したならば人欲を免れない。禪では不擧心動念といひ、孟子は不動心と謂つてゐる。この禪の不擧心動念といふことを異端と呼ぶならば、その前に先づ孟子から攘斥して掛らねばならぬ。

若し孟子を除いて禪を攻めるならば、それは舜犬堯に吠ゆるの謂である。(註一三)

朱子の學說では理を以て宇宙の本體と見、之を窮めることを主張する。然し隱溪は其の妄を論じて曰く、世には事障と理障とがある。特り事障が吾心を障るのみでなく理も亦能く吾心を障へるのである。圓覺經にも

若諸衆生先除事障。未除理障。但能悟入聲聞圓覺。未能顯住菩薩境界。

と言つてゐる。若し學佛者がこの理を明にせなければ、心性の眞を識することは出来ない。が然し此の理に執滯することも亦心性の爲に礙げられることを免れないのである。故に勉強して此の理を研究し、中道に従容して後、此の理に執滯せない様にせねばならぬ。河を渡るには筏を用ふるも、岸に到つては之を必要とせぬ様な譯であつて、此は佛教丈に説く所ではない。彼の顔氏が怒を遷さず、過を貳せないのは、事障を除いたことで、愚なる如く坐忘するに至つたのは理障を除いたことであ

る。彼の朱子は此處まで解つてゐない爲に、此の理に執滯し、佛家で此の理を厭惡するとして實見の差を言ふけれ共、識者から見るならば却つて朱子の方が謬つてゐるのである。(註一四)

と明辨して居り、又關異の中から、次の一條を取り來つて、仔細に検討してゐる。

或ひと問うて曰く、昔一禪僧あり。毎に自ら喚んで主人翁惺惺著と曰ふ。大學の或問にも亦謝氏常に惺惺する法の語を取る。知らず、是れ同か是れ異かと。朱子曰く、謝氏の説は地歩闊にして身心事物の上に於て皆工夫あり。若し禪者の見る所の如きは、只箇の主人翁を看得して便ち了す。

其の動じて理に中らざる者は、都て管せず。且父子の如きは天性なり。父他人に無禮を被らば、子は須らく當に去て救ふべし。他は却つて然らず。子若し之を救ふの心あらば、便ち是れ愛に牽かれて心を動了すと。便ち是れ主人翁を昏了する處なり。若し此の如く惺惺せば甚なの道理をか成さん。向に曾て四家録を覽しに此の説話あり。極めて好笑亦駭く可きの説なり。父母、人の爲に殺されしに一も心を舉し念を動すること無きが若きを方に始めて名けて初發心の菩薩と爲すと。他の主人翁惺惺著と喚ぶ所以は正に此の如くならんことを要す。惺惺の字は則ち同じ。作す所の工夫は則ち異なり。豈日を同うして語る可けんや。

かくの如き朱子の説に對して隱溪は之を反駁していふ。四家録を再三舒卷したがかういふ言句は見

當らない。蓋し朱子は斷章取義の意から禪を訕謗しようとしたものであらう。且謝上蔡は程子門下の高弟で禪に溺れたと評せらるる人で、朱子も自ら「伊川の門、上蔡は禪門より來り學ぶ」と言つてゐるのである。禪門から來り學んで瑞岩の喚ぶ主人公と其の歸を殊にする理があらうか。瑞岩の場合と上蔡との間に狹濶の差を立つべき所以が解らない。矧んや又主人公たるものは、清淨妙湛圓明虛靈であつて、過不及の名づく可きなく、倚偏の資つて比すべきなく、杳然として端倪を離れ、漠然として形相を絶したもなるに於てをやである。狹濶によつて之を管することは出來ない。是れ蓋を以て海を測るが如きもので、寔に測る者の愆である。(註一五)又朱子は動じて理に當らざるものは都て管せずと言つてゐるが、禪門では六祖以來多く禪理を談じて禪行を談することは少れである。且つ道を見ること頭然を救ふ如くならしむるのである。彼の黃山谷の所謂「深く禪悅を求め、生死の根を照破すれば、則ち憂畏淫怒、處として脚を着くる所なし、但々其の根を枯せば枝葉自ら瘁る」といへるが如きものである。動じて理に中らざるものは都て管せずなどと謂ひ得る筈はないのである。(註一六)

以上のような隱溪の朱子に對する痛烈な反駁について

或人は朱文公は千歳の賢良偉才、博達にして廣く古今に亘つて詩書易春秋を訓釋し、聖人の心胸を振起し、後世の學者をして悉く歸く所を知らしむ。是の故に其の功、儒門に標表す。噫、知るや知らずや。子は又緇徒の一數のみ。縦ひ議論の繇る所ありと雖も、謗を朱子に加ふること我文士の爲に之を羞づ

と曰ふものがある。然し古人も「苟くも理に當らば婦人孺子の言と雖も棄てざる所である」と言つてゐる。設ひ天下の豪英と雖も、其の言が公正でないならば、誰が敢てその言を口にするであらう天下は唯々道德の一理あるのみである。理に戻乖する處があれば、如何なる博達偉才も我は屑とせないのである。昔孔門に於て子貢は聰明才辯を具へ、子游子夏は文章に長じたけれ共、今尙以て顔子の終日愚なるが如く、曾子の一生魯に似たのには及ばないとしてゐる。況んや世智辯聰の輩をや。又詩書春秋の訓釋を以て朱子一人の功とするのであらうか。儒道を事とするものは古今枚擧し難い。其の作つた註解も亦幾千萬言と言ふことを知らぬ程である。朱子は其の言を兼頼し、其の意を剽掠し、之か爲に修飾を加へ潤色を添へて、後世に垂れたまでである。然し其の書が後生に便利な爲に用ひられた事は彼にも儒門に功が無いとは言はれない。只恨むらくは私矜を胸襟に餘して、飽まで人天の眼目を瞎ましてしまつたのである。誰か其の功を言ふ可きであらう(註一七)と言つて隠



溪は驀地に朱子に突撃しようとするのである。思ふに朱子學は鎌倉時代の初期に我が禪僧によつて移入されて五山の禪侶に弄ばれ、中世文化を彩つた學術であつたのみならず、徳川時代の學問は何と言つても朱子學が中心で幕府の御用學であつて、朱子學に異説を唱ふるものは、一種の危険思想家とさへ目さるる時もあつたのである。然るに隱溪がかの如き態度に出て、朱子學説に於ける矛盾を暴露し、佛者の爲に蒙を辨じたことの大膽且つ博識には敬服せざるを得ないものがある。然し禪るところ無く吾人をして言はしむれば、隱溪に於ける儒學觀も宋儒的であつて孔孟の原始に復つたものではなく、經典の理解も朱子と同一轍に在ることは其の醇儒でないといふ條件を許すとしても免れない事實であると思ふ。隱溪の合論には餘り論及してゐないけれども、朱子はその十五六歳の頃から四十二三歳までの前後二十五年間に亘つて、我が禪宗に學び大慧宗杲や開善の道謙禪師に參得し、又彼の師である延平の李侗の指導の下に禪の真髓が平生心に在ることを自覺したといふ修禪人であつたことは、我が長友横田宗直師が往年史學雜誌に其の歴史的考證を發表してゐることも明かである。のみならず朱子の先輩たる周張二程の諸儒も、皆禪によつて見識を作り而して孔孟の古典を自家藥籠中のものとして解しようとしてゐるのである。朱子は是等先輩の業績の集大成者である。孔孟の思想に無かつた所の老莊的な哲學や、禪的工夫によつて得た所を以て自己の思想を裏

づけ更に孔孟の經典をも説明しようとしたのであるから、其の間には當然許す可らざる矛盾があるのは已むを得ないのである。朱子は内に禪的な根底に養はれ、佛教的な思想に培はれ乍ら、外に之を排除して醇儒たる立場を守らうとしてゐる處に己に避け難い無理が存するのである。

隱溪の儒佛合論を讀んで吾人は如何に其の博覽であり能文であるかに敬服するものである。然し朱子に對する批判に就ては今一つの徹底を缺いてゐるかの恨を禁じ得ない。その佛書傳説を信賴し過ぎるの限りに於ては、又頗る怪詭とさへ考へらるる非學問的所論をも無雜作に述べてゐることも注意して置きたいと思ふ。

要するに隱溪の勞作は朱子一派の排佛に對する是正であつて、同時に闡齋一派即ち崎門派への挑戰でもあるし、更に當時の儒家一般の排佛的思想への辨駁である。故に儒佛合論の最後の卷には韓愈の佛骨表に論及し極力其の非を鳴らしてゐるのである。而して隱溪は我が佛教の他教に勝れる點を擧げて、

抑も己に恕にして物を及ぼすは佛の弘きに孰與ぞ。末を觀て本を知るは佛の遠きに孰與ぞ。善を勸め惡を懲すは佛の法に孰與ぞ。空を破り有を折くは佛の教に孰與ぞ。死生無窮の縁を論じ報應不朽の旨を明す何れの教か之に如かん。何れの道か之に加へん。甚深微妙の法理五戒十善の言教

は、先王の道、古今の宜、聖人の設と雖も、何を以てか此に及ばん。(註一八)  
と言ひ、唐の韓愈の佛骨表の如きは、國の爲に謀つて忠ならざるものであるとて、其の非を鳴し、別に佛骨表論といふ一篇をものして之を詳論してゐる。

又歐陽修の新唐書に就いて論ずる所を見ると、

歐陽子が新唐書に、太宗の徳義を貴んで三代の聖王に比する所以は宜なり。而も太宗の浮圖を崇ぶことを嫌ひ、賢臣の正法を信することを嫉んで、元首の明を掩ひ、賢臣の迹を藏め、咸く佛事を削り、私意臆説、妄に褒貶を行ひ、己が欲する所の百一を存し、後世の者をして彼の事蹟を知らざらしむ。是豈史を爲る者の法ならんや

と難じ、呂東萊は、史官は萬世是非の權衡である。禹も鯀のことを褒める事は出來ず、管蔡も周公を貶することは出來ない。趙盾も董狐の書を改め得ず、崔氏も南史の簡を奪ふ譯には行かなかつたのである。公是公非、天下を舉げて之を移すことは出來ぬと言つてゐる。李翱も、勸善懲惡正言直筆して聖明の功德を紀し、忠臣賢士の事業を述べて、無窮に傳へる者は、史官の職であると言つてゐるのである。又劉向の戰國策の序にも、史氏の法は具に一時の事辭を記し、善惡は必ず書して私に決擇の無いことが、春秋の意に悖らない譯であると記してゐる。彼の范曄が後漢書を著し、太宗

が晋書を修し、魏收が北史を作り、李延が南史を編した時も、凡そ帝王公卿の事迹は、佛教や老莊を毀讚するに遠ぶまで悉く載せない點は無かつたのである。然るに今歐陽修の新唐書と舊唐書とを對校して見ると、舊史に載せた所を新史の方で削り取つた點が凡そ千有餘條に及んでゐる。そして其の削る所を調べて見ると、皆佛法を崇んだといふ事蹟に屬するのである。假令、佛法を崇んだ所の事蹟と雖も、私に之を削つて其の事實を没することが出来る筈のものであらうか。之は只同を好み異を惡むの辟から出たものであつて、所謂治亂成敗の實を泯滅する者と謂はねばならぬ。今日新唐書が唐時代の正史と爲つてゐることは實に嘆すべきことである。(註一九)或は、孔子が怪力亂神を語らずと言つた事から孔門の學徒とは怪異を言ふことを避けるのである。然るに佛教では神怪に涉ることが多い、それで歐陽修は、之を刪つたのであると辯護するものがあらう。然し孔子は名教の祖として訓を世に垂れ、凡庸のものがこの怪力亂神の四つの事に溺れるであらうことを思うて、豫め疑誕を避けてゐるのである。君子は能く之を辨じ之を明にすることが出来るのである。歐陽修の如きは此の孔子の意を明に認識することの出来ない偏識者でしかないと思ふ。古人も已に辨じてゐる様に、怪力亂神の四事は昧き者の溺るる所ではあるが、孔子も絶対に之を記さなまいといふ譯ではない。易にも、「神は萬物に妙にして言を爲す也」とある。之は神の事を言つたのである。春秋二

萬言は皆衰周の諸侯が攘奪の事を書いたものである。是は亂の事に及ばぬと言へるであらうか。孔子の勁、能く國門の關を扛げたといふ事がある、之は口で言ふのみで無く身自ら之を爲したのであつて力について語つてゐるのではないか。季桓子が井を穿つて土羊を得たことを、孔子は木石水土の怪を以て辨じてゐる。之は怪の事を言つた例であらうと思ふ。凡そ經傳の中には孔子が怪力亂神の四事に言及した點は縷擧するに暇ないくらいある。然るに歐陽子は何故に之を知らないのであらうか。縱使語る可らざる事蹟と雖も、時君が之を好んだならば史を作る者は、並び書して後世に垂れて可なりである。歐陽子の如く、例して之を刪去するのは、偏識に非んば私矜の致す所である。

(註二〇)按ずるに歐陽子が新唐書に於て佛教的な事件を多く削つた爲に後の史を作るものも佛事を削るのを法とする様になつて來てゐる。然しそのまま佛を尊ぶ所の惡君姦臣があつて其身を滅ぼした様な場合は略々佛に奉じた事蹟を記して其の咎を佛に託し、明君賢臣の佛に違つて治化を施したといふ事蹟の有る時は一向に之を削つて其の徳を孔子に歸してゐる。若し神を語らないといふ蹤を師として、常に佛事を避けねばならぬならば、惡君姦臣の事蹟と雖も盡く之を削つてよい。若し神を避けなくて史傳を施すといふならば縱使明君賢臣の佛を崇ぶ事蹟とても記さなければならぬ筈である。ああ史氏に於て吾何をか責めん、只後の史を讀まん者の史氏の偏識を察せずして却つて佛を慢せん

とするを哀しむのみである。(註二)と言ふ如き隱溪の史眼には吾人と雖も首肯すべき理由があると思ふ。

又歐陽修は新唐書の中で韓退之の佛老を排撃した功を稱して、孟子が揚墨を拒いだ功績に比してゐるけれども、其は世を同うして語る可らざる所のものである。排佛家の韓退之も潮洲の謫居で大顛和尚と會ひ、其の聰明にして道理を識り、能く形骸を外にし、理を以て自ら勝ち、事物の爲に侵亂せられない所の人格に觸れることが出来たので、「之と語つて盡く解せずと雖も、胸中に滯礙無し」と告白するに至つたのである。或人は韓退之が孟簡に與へた書に「愈、近ごろ少しく釋氏を奉ずとは、傳者の妄なり」といひ、又「其法を崇信して福田利益を求むるに非ず」と書いてゐる點を取り上げて、韓退之は明かに佛道を信じなかつた人と斷定するのであるが、古人も興福の事理を論じて、「夫れ理懺を修するや、淡慮にして心を觀じ、心に所生なく、生に所住無し、その時に當つて、順違無相なり、無相なれば則ち罪滅して福生するの地なり」と曰つてゐるし、崇大師は、佛教で福田利益を至論する時は、正に理に従ふをば福とし、性を得ること法の如くにして、外物の爲めに惑はされ無いのを最大の利益となすと言つてゐる。是の故に韓退之が如何に自ら掩はんとしても「胸中に滯礙なし」といつた事は無所住の謂に違ひない。矧んや、理を以て勝つと言ふ四字には之

に加ふべき何ものもない。たとひ周公孔子が再び後世に現はれて、千言萬語是非の門を開かうとも理を棄てて言を立てることは不可能である以上、此の四字に於て更に何をか加へ得るものがあらう（註二）韓退之も大顛禪師によつて改むる所があつたと考ふべきである。之と共に歐陽修も自ら「潞州に左遷せられ、明年將に廬陵に歸らんとす。舟九江に次る。因に意を廬山に託し、東林の圓通に入り祖印禪師に謁して、儒佛楊墨の論を窮めて、胸中己に釋然たり」といひ、又晩年に及んで、彼は居を穎上に卜し、酒肉を捐て、聲色を徹たち、自ら六一居士と號し、將に終らんとするや、華嚴經を借りて讀み、讀んで八卷に至つて卒したのであつた。かくの如くにして韓退之も歐陽修も共に佛教の信者となつた形迹があり、又其の外護と曰へるのである。然るに後人は前時の舐排のみを見て、後來の信服を察せず、肆に毀物を鼓して佛の尊ぶべきことを知らないのは悲しむべきことである、（註三）と、言ひ、更に儒佛合論の最後に、「佛法金湯」といふ一篇をものして、

夫れ異道の我と競ふや、西天に九十五種の婆羅門あり。震旦に儒墨老莊の者流あり。時に乗じて佛者を凌ぐこと少なからず。而も我が日域は醇淑大乘の疆に當つて、神道の一流、名分を立て、大聖の應用同體分身の故を以て、我が法を尊ばざる者はあらざるなり。嗚呼時か運か。頃このとろ宋儒の蹤を師として佛氏を排る者甚だ夥し。是れ蓋し教季の効か。然りと雖も、明の明たるや、暗に

由つて名を立つ。若し暗の暗たる無くんば則ち安ぞ能く明の明たるを知らん。如今佛法衰廢の時に臨んで、若し儒の我を攻めて起すこと無くんば則ち安ぞ能く廢の廢たるを知らんや。怠墮多きは佛門の光輝を失して宗風地に落ちん。然らば則ち聖教の序も金城たり。佛骨表も亦金城たり。護法論も湯池たり。無佛論も亦湯池たり。是れ實に魔々民と雖も佛乘を護るの謂か(註二四)

と結んでゐることは洵に至言といはねばなるまい。又隱溪は張商英の説に

儒者は性を言ひ、佛者は性を見る。儒者は心を勞し、佛者は心を安んず。儒者は貪著。佛者は解脱。儒者は喧嘩。佛者は純靜。儒者は勢を尙び、佛者は懷を忘る。儒者は權を争ひ、佛者は縁に隨ふ。儒者は有爲、佛者は無爲。儒者は分別。佛者は平等。儒者は好惡。佛者は圓融。儒者は望み重く、佛者は念輕し。儒者は名を求め、佛者は道を求む。儒者は散亂、佛者は觀照。儒者は外を治め、佛者は内を治む。儒者は該博、佛者は簡易。儒者は進求、佛者は休歇。(註二五)

と言ふことを掲げ來つて、是れ皆儒佛の道を究盡して其の意を盡した言で、其の心苗は虚設でないとか肯定してゐるのである。吾人亦讀んで是に至らば蓋し思半ばに過ぐるものが有るのではなからうか。

隱溪の儒佛合論は、大體から言へば、儒と佛とに關する雜纂的の著作である。故に其の内容は該博汪洋極りなく上來紹介した事



項以外に、釋氏の孝道帝王君臣の崇佛、或は鬼神、肉食犠牲、殺生の論、佛經の感驗、感格、舍利の説等幾多の問題に筆を驅り、時には一種の科史野乘、神話傳記を繙くの感をすら抱かしむるものがある。ここに多く記述し能はなかつたことは余の遺憾とする所である。

註 一、大高坂芝山、南學傳下卷、稻葉正信、先達遺事、(日本儒林叢書第三冊、史傳部所輯)

川上孤山、妙心寺史下卷、一一八頁、

註 二、山崎闇齋、關異(日本倫理叢書卷之七、三七四頁及び三七三頁)

註 三、同上

註 四、關異の著作を闇齋三十歳の時とせば正保四年(二三〇七)に當る、

註 五、儒佛合論には卷首に、寛文八年仲春日に書かれた隱溪の自序があり、卷末に隱溪の跋文を載せ、

寛文八年戊申戴孟夏辰新刊

書肆 二條通松屋町 田中長左衛門

同 鶴屋町 田中仁左衛門

といふ刊記がある。今此の全卷の板木は妙心寺塔頭、蟠桃院に藏されてゐる

註 六、儒佛合論卷一、大道之本論の條

註 七、儒佛合論卷一、論謂道只是君臣父子日用常行當然之理、の條

註 八、儒佛合論卷一、論謂非有玄妙奇特不可測知如釋氏所云、の條

- 註九、儒佛合論卷一、論謂豈是以我之心還見我心別爲一物而在身外、の條
- 註一〇、儒佛合論卷一、論謂心思路絶二の條
- 註一一、儒佛合論卷六、謂微驗二の條
- 註一二、儒佛合論卷六、見性緩急之論の條
- 註一三、儒佛合論卷五、舉心動念論の條
- 註一四、儒佛合論卷七、謂厭惡理之論の條
- 註一五、儒佛合論卷五、論主人公の條
- 註一六、儒佛合論卷五、論謂動而不當理者都不管の條
- 註一七、儒佛合論卷一、朱文公二の條
- 註一八、儒佛合論卷九、論謂當時群臣識見不遠不能深知先王之道古今之宜、推闡聖明以救其弊の條
- 註一九、儒佛合論卷九、唐史の條
- 註二〇、儒佛合論卷九、怪力亂神の條
- 註二一、儒佛合論卷九、元魯山の條
- 註二二、儒佛合論卷九、退之四の條
- 註二三、儒佛合論卷九、歐陽子の條
- 註二四、儒佛合論卷九、佛法金湯の條
- 註二五、儒佛合論卷六、謂微驗六の條